

◆編者からの応答 3 ◆

3人のコメントにお応えして

Reply to three commentators

池田 光穂
IKEDA MITSUHO

大阪大学 CO デザイン研究センター
Osaka University, Center for the Study of CO* Design

キーワード

「ワンちゃん」 愛情の寄生虫 パースペクティヴィズム 人間と犬の存在論的置換 犬の擬人化

Keywords

“doggy”; amoral parasite; perspectivism; ontological turn from human to doggy; anthropomorphism of doggy

原稿受理日：2020.1.31.

Quadrante, No.22 (2020), pp.141-143.

はじめに、心温かいまたそれぞれ個性的なコメントをお寄せくださった松本朋華さん、村上正樹さん、伊東剛史さんのお三方に感謝を申し上げたい。それぞれ人間語で話されたので、まず三者を僕こと拙犬がどのように受け止めたのか、人間語でまとめてみたい(図1)。

最初は松本さん。ご実家が動物病院を運営されているということで、必然的に犬を含むさまざまな動物が実質的に家庭生活のなかに必然的存在として介入してきた経験から説き起こされている。松本さんの経験が濱野論文のズーのメンバーの人たちの犬との不思議な異種間(異種姦?)愛情の経験と比較されながら、松本さんなりに咀嚼解釈されてゆく。それは我々がペットに抱く愛情の様式とは根本的に異なり、そのことにより人間と動物の境界の位相がまるで異なった関係に見えるということなのである。これを皮切りに本書の他の論文との松本さんによる定点測量が始まる次第だ。

つぎに村上さん、獣医の卵として、動物に仕える必要から犬ではなく「ワンちゃん」とお呼びしなくてはならない事情と、郷里の瀬戸内海の沿岸の町で育った野良犬の逞しさと、そ



【図1】筆者による、狗類学の調査中の一枚。本書出版後の2019年12月のある日、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスの自然史博物館近くのセンテナリオ公園でみかけた紳士。私(池田)は『犬からみた人類史』を編集した一人なんですよ、と自己紹介したら喜んで撮影に同意してくれました。



3 人のコメントにお応えして

のような感情の飼い慣らしを遥かに凌駕する野良犬への恐ろしさが、両立できないと正直に述べられている。その犬への感情のアンビバレント（二重価値性）が、ご自身でいまだに克服できない途上にあり、本書への書評が依頼されたこと。そのような二重性を克服する意図のない状況で、松本さんのコメント同様、拙論の犬ではなく当の「人間」こそが、犬にとっての「愛情の寄生虫」に他ならないという主張に出会って「胸のすく思い」をされたとのこと。僕は別にウケ狙いをしたわけではなく、ちょっと気の利いたことを言ってやろうと何気に書いた拙文に、過分にお褒めの言葉をいただき、まったく著者犬冥利に尽きます。

そして、人間と動物の関係の文化史研究のプロたる伊東さん。もう十分に非常に精巧なコメント。僕たちが努力して掲載を熱望した、索引やクロスレファレンス、そしてウェブサイト用語集（これは第二刷より増ページされて本文に収載されています—お買い得!）が本書に「大いなる統一性」を与える目論見であったことも、的確に見破られてしまった。さすがにこれまで多くの学術単著や編集本を世に出されてこられた伊東さんならではコメント。「ぞつわ」伊東さんって優秀な麻薬探知犬の生まれ変わりなんではしょうか？ こちとらとしても、犬の気持ちになって、まさに痒いところに「後ろ脚」が届くということはどういうことである。また、僕たちが提唱しつつある狗類学を「人間 \leftrightarrow 犬（狗）の存在論的置換」であると見事に喝破していただいた。また、それがパースペクティヴィズム（＝犬の視点から見てみる）と擬人法（＝犬に人間的性格をあたえる）という2つの方法論からなりたつ旨も指摘していただき、今度は僕らの「胸のすく＝感動の遠吠えの思い」であります。さらに、その方法論の限界を「人を動物に擬える、すなわち動物に特有の性格・能力を人にあたえる擬獣法（zoomorphism）を想定してもよいのではないだろうか」と新たに提案されていただいた。そして最後には、

本書の論文に通底している、犬を権利主体として認め「犬を子供扱いしない」という視座の共有に触れて、本書の外側で頻繁におこっている「かわいい化（cutification）」現象と今後どのように折り合いをつけていくのか、という宿題もいただいた。

三者犬三様のご意見なので、それぞれ犬（＝「わん!」）パラグラフずつ、そこからの拙犬＝僕の感想を述べてみたい。

さて、松本さんが昔のご自身の経験から解き明かしておられるので、僕もまだ人間だった時代のことを話そう。僕の動物ペットの経験はそれに比べてそれほど豊かなものとは言えない。小さい時に鴨を父親がどこかからもってきて専用の飼育小屋で育てられ、ある日それが鴨鍋に変わり、年少の妹が突然出奔したかのように「カモちゃんはどこにいったの？」と父親に質した。彼は後々になって妹の幼い口真似をして「カモちゃんはどこにいったの？」と冗談まじりに食卓ですること、これまた幼い僕は、父親が妹をからかうようで、僕は犬なりにちょっとした反発というか、人間の大人の残忍さを覚えたことがある。その次は、母親の実家のそのまた知人からやってきた血統書つきの黒毛に茶のスポットが入ったラニーというダックスフンドだ。ラニーというのは母親の説明によるとインド王朝のお姫の名前だという。小学6年生から中学3年生まで僕のベッドの下で寝ていたが、いつも夜中になるとベッドの縁に胴長で尻尾を振って僕のベッドに上がろうとした。そのためいつも彼女と同衾することになった。彼女の困ったことは「月のもの」が時々やってくることである。さすが女性というべきか僕の母親は月経というものがどのように去来するのか、人間の性教育ならぬ犬の性教育として教えてくれて、その時は、妹の小さいときのパンツに彼女は尻尾を通す穴をあけて、月経帯をつけていた。血液の匂いや汚れなど僕はそこで体験したためだろうか、人間の女性の月経についても、その後なんのためらいもな

く「自然現象」として受け入れて、不用な忌避・嫌悪感をついぞ抱くことがなかった。後に医療人類学で月経の比較文化論を書いた経験もある¹。僕が至極まっとうな医療人類学犬であるのもこのラニー姫のおかげであろう。その2年後、彼女は自動車にはねられて生涯子供を持つことなく昇天した。

次に村上さん。獣医師として将来患者であり、ご自身の商売道具になる犬を「ワンちゃん」と呼ばなくてもいいのではないかと勇気を持ってご提案さしあげたい。それは、伊東さんが僕たち編者犬に新規にご提案いただいた擬人法ならぬ擬獣法のマインドでお犬様に接してほしい。それはワンちゃんという呼称表現の濫用は、やはり伊東さんのいうところのなんとなく小馬鹿にする「かわいい化」の罠にハマった現象であるために、狗類の、狗類による、狗類のための (of the canine, by the canine, for the canine) の犬本位の姿に立ち戻るとすれば、患者の家族たる人間が呼んでいる呼称をそのまま (例えば「タローちゃん」ならリスペクトして「タローさん」と) 呼べばよろしいのではないかとと思われる。できれば、ご卒業までに狗類語習得の研鑽に当たられ、日本どころか史上初の狗類語によるインフォームドコンセントを実践する立派な獣医師なられんことを!

そして最後に伊東さんに。〈犬の擬人化〉と〈人の擬犬化〉とを往還すること、大いに賛成である。大学院の卒業研究でトーマス・トウェイツさんは、トースターを個人が材料からすべて自作するとどのようになるかと物議をかました「トースター・プロジェクト」を開始した。そ

して、その卒業制作の成果物は、なんと——サイエンスとアールナイツ (素人芸術) を架橋する!——そのおどろおどろしいゲテモノ美術品としてニューヨークの近代美術館 (MOMA) に購入収集されたそうだ。そして、そのウェイツさんがヤギのように四足歩行できる人工装具を使ってヤギになりきる「ヤギ人間プロジェクト (GoatMan Project)」により、2016年イグ・ノーベル生物学賞を授与した²。彼は、その間、ヤギと同じまったく食生活を過ごし大量の若草をたべてお腹を壊しながらプロジェクトを続行したそうだ——これぞ存在論的置換を地で行く立派な研究である。誠にこちらのほうのお腹が痛くなるぐらい犬腹が締め付けられる話である。僕たちは、ぜひとも、類似の人類＝狗類置換大計画である「狗類人間プロジェクト (CanineHuman)」——Man は男性中心主義の残滓があるのでヒューマンとした——で202X年の同賞を伊東さんとともに目指そうではないか! と決意を新たにす次第である。

三者犬、三様で我ら三編集犬とも感涙と (かつてのご先祖様の敬服の念の表現たる) 遠吠えを期せずして覚える次第なのである。うおおおおおおっお——————っ、うお——っ!!!

¹ この原稿は数奇な転生を三度繰り返す。最初は、出産 (生活史小事典), 週刊百科「世界の歴史」, 第79号, pp.510-512, 朝日新聞社, 1990年6月として。二度目は同じ書肆から『世界史を読む事典』[共著] 朝日新聞社編, 朝日新聞社, (担当箇所: 出産, pp.223-228), 1994年1月として生まれ変わり、そして三度目は、単著として『看護人類学入門』265pp., 文化書房博文社, 2010年の第4章「出産にまつわる文化」として、改稿のたびに変化を遂げてきた。出産も月経も僕が経験しない「遠い経験 (experience distance)」であったのに初出から数えて30年間で僕には「近い経験 (experience near)」——共にオーストリアの精神分析医ハインツ・コフートの言葉——になってしまった。これも愛犬ラニーのお陰かもしれません。

² 2冊の本とも翻訳家村井理子さんのお陰で、秀逸な訳文として読むことができるのは日本語利用者にとっては幸せである! トーマス・トウェイツ著『ゼロからトースターを作ってみた結果』村井理子訳, 新潮社, 2015年。ならびに、トーマス・トウェイツ著『人間をお休みしてヤギになってみた結果』村井理子訳, 新潮社, 2017年である。